

■ 肢体不自由のある子どもたちへの実践事例

子どもたち一人一人の実態に合った 読書形態を検討し、提供していくこと

東京都立八王子東特別支援学校
谷本式慶

はじめに

本校は、小学部1年から高等部3年までの児童・生徒145名が在籍する肢体不自由特別支援学校です。2012年度より、わいわい文庫利用研究校となり、マルチメディアDAISY図書は、貸与されたタブレット端末（iPad1台、iPod10台）および校内のタブレット端末（iPad 9台）に導入して活用しています。

< iPodへの作品の収納方法 >

iPod 9台それぞれにすべての作品を入れていましたが、わいわい文庫全体の作品数が増加して収納しきれなくなったこと、多くのなかから読みたい本を探すのに手間がかかることなどから、昨年度より端末を用途別に区別して使用しています。区別の方法はタイトルの再生時間としました。①1分から20分まで、②20分から1時間まで、③1時間超、の3区分とし、それぞれ3台ずつにしました。このことにより、対象の子どもたちにちょうどよい作品を探しやすくなりました。

これまでの取り組み

本校では、

- ・マルチメディアDAISY図書は、学校のなかではどのように活用できるか
- ・マルチメディアDAISY図書周知のための活動

を行ってきています。そのなかで、マルチメディアDAISY図書がどのような子どもたちに有効かを、本校なりにまとめてきました。

本校に通う子どもたちとDAISYとのかわりについて、

- ①本導入期の子どもたち、
 - ②文章を読むことは難しいが、聞いて理解できる子どもたち、
 - ③一人で本を楽しむことができる子どもたち、
 - ④それを目指す子どもたち、
- のような整理を試みました（『わいわい文庫活用術④』参照）。

そして、昨年度より「児童・生徒一人一人の実態に合った読書形態を検討し、提供していく」ことに取り組んでいます。

ライブラリーオリエンテーション

本校では、毎年ライブラリーオリエンテーションを複数回行い、貸出方法の説明やさまざまな読書媒体の紹介を行っています。その際には必ずマルチメディアDAISY図書を、児童・生徒や教職員が体験できるようにしています。新入生や新職員にとって有効であると同時に、存在を知っている人にとっても思い出して使用する機会となっています。



オリエンテーションのはじまり



さっそく自分で試してみる



本のおもしろさを実感

マルチメディアDAISY図書の活用事例

①本導入期の子どもたち

まだ本に触れる経験が浅い子どもたちは、身近な人に絵本を読んでもらうことで、その人の声に反応して本のほうを見ようとしたり、自分でも手に取ってページをめくろうとしたり、一緒に声を出そうとしたり、と少しずつ本に興味をもっていきます。

まだ身近な人の働きかけが必要で、一人で本を楽しむには積み重ねが必要な段階です。このように子どもたちに折に触れ本を提供することは重要ですが、いつでも行えるというわけではありません。そのような、近くにはいるけれども本を読むことはできないという時間において、マルチメディアDAISY図書はとても有効です。

小学部2年生のAさんとBさんは、食後のセラピーマットでのひとときに、時折iPodで読書をしています。

Aさんはお話が聞こえると、いつものようにゆっくりとマットの上を移動しているようでありながら、iPodの近くを行き来し、時に顔を近づけてよく聞いています。



見て



聞いて



これがぼくの読書スタイル

Bさんは、マットの上で手足を動かしたり大きく身体を揺らしながら移動したりしていますが、お話が聞こえると身体の動きを止めて聞き入り、時ににっこりと笑顔になります。紙芝居風の録音や、繰り返しのあるフレーズを含む短いタイトルを主に楽しんでいます。

絵本を読んでもらうのが好きな小学部3年生Cさんは、昼食後30分ほどの間、車いすに座っている必要があります。

その時間に、玩具での手を使った活動や「わいわい文庫」での読書をしています。画面が小さいiPodでは見えにくそうでしたが、iPadの「わいわい文庫」では画面をしっかりと見ることができています。

『おおきなかぶ』のお話が聞こえると笑顔になり、「うんとこしょ どっこいしょ」のセリフの場面では、一緒に声を出すこともあります。何度も聞くうちに「うんとこしょ どっこいしょ」の前のセリフ「おじいさんがかぶを引っ張って」のところから笑うようになってきています。



声をあわせて「うんとこしょ どっこいしょ」

高等部1年生のDさんの昼食は、1時間弱車いすに座って経管栄養注入にて行います。その間動かずに静かにしている必要があります。後半になると泣くことがしばしばありました。そこで、その時間にiPadで「わいわい文庫」を読むことにしました。眼鏡をかけ、目の前にアームで固定された画面を見ながら読んでいます。

Dさんのお気に入りには『11ぴきのねこ』シリーズのお話です。なかでも特に『11ぴきのねこ どろんこ』が気に入っていて、疲れた様子の日でも、泣いているときでも、これを読めばいつでも笑顔になります。このおかげで、Dさんは注入時間に泣くことがほとんどなくなりました。



アームでタブレットを固定



どんどんお話にひきこまれる



『11ぴきのねこ』で気分爽快

② 文章を読むことは難しいが、 聞いて理解できる子どもたち

一部文字が読めるなど文字の世界に入りつつある子どもたち、文章を読むことは難しいが、聞いて理解できる子どもたちにとって、かたわらで本を読んでもくれるマルチメディアDAISY図書は非常に効果的です。

ひらがなが読めてカタカナを学習している中学部1年生のEさんは、とても文章に興味があります。

本を読むときは、指で文字を追って小さく声を出しながら読んでいます。本によっては長い時間集中して読み続けていますが、読み飛ばしや読み誤りが目立つこともあります。

そんなEさんの国語の授業で、「わいわい文庫」を使用しています。マルチメディアDAISY図書は、Eさんの読み誤りの指摘はしませんが、いつでも穏やかに正しい読みを教えてくれます。見本を聞くことで、Eさんは正しい読みを学習していています。読み上げの音声に合わせて、小さく声をだしながら読んでいます。

『おとうさんはウルトラマン』『まいごになった子どものクジラ』など、いろいろな本を読んでいます。聞くことで、読みが上達し、理解も進んでいるようです。



タブレットでたくさんの本を読破

高等部2年生のFさんは、読むより聞いて理解するほうが得意です。iPadのDAISY図書を手頃に扱えて、聞くことでお話を楽しむことができますが、いまは、読書よりも友達とのおしゃべりやスポーツに夢中になっているようです。自分に向けた読書の方法を知っていますので、いまの読書量は少なくても将来の強みになると考えています。今後の学校より長い社会生活で、その力を発揮する 때가くると考えています。



イヤホンとタブレットが読書アイテム

まとめ

ここまで、本校におけるマルチメディアDAISY図書の活用について記してきました。そこからは、

- ・子どもたち一人一人にあった読書形態は、その実態からさまざまである
- ・子どもたち一人一人の実態に合った読書形態を検討し、提供していく必要がある

ということがいえると考えています。マルチメディアDAISY図書が有効だと考えられる子どもたちには、選択肢の一つとして提供できるよう整えておく必要がある、ということです。

「子どもたち一人一人の実態に合った読書形態を検討し、提供していく」ことに向けて、引き続き取り組んでいきたいと考えています。

